
魔法少女リリカルなのはStS to Force -0から1まで-

しゅれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStS to Force - 0から1まで -

【Nコード】

N3113W

【作者名】

しゅれ

【あらすじ】

ちよつと変わった感じのなのはを書きたいかなとか思ってたみて、後悔は（ry
主人公は強いのか弱いのか、戦闘物なのか恋愛物なのか、すべては未定の成り行き任せストーリー。もしかしたら読者考案あるかもなハチャメチャ創作ですがよろしくお願いします
原作崩壊とか多めなのでそういうの嫌ならブラウザバック！

P r o l o g u e (会 話 o n l y) (前 書 き)

会話しかないprologueという新しい（）形にチャレンジしてみたりしてみました

Prologue (会話 only)

「……はろー。こちらアイレイン魔術院、レーヴェ・J・F・アイレインです。通信のかけ間違えではありませんか？」

「お前、露骨に着信見ってから嫌そうな顔するのやめたほうがいいんじゃないのか？」

「それよりも懐かしの魔術院の名前に反応してくれないんですかゲンヤさん」

「今じゃ廃業しちまっただろうが……お前の親御さんの代だよ」

「廃業、というよりもと廃業してたようなものがこれで終わって宣言しただけじゃないですか」

「その廃業後に世話になってたやつらもたくさんいたじゃねえか……相変わらずだなあお前も」

「ガキで結構。で、実際ウチに何の用です？僕はもう陸士108とは無関係だと思えますけど？」

「いやあ、ちょっと厄介事頼まれちまってな……」

「厄介事？ゲンヤさんが厄介事に絡んでないことのほうが珍しい気がしますけど……」

「そついうんじゃねえんだよ今回は。お前さん、八神はわかるよな？」

「……………ゲンヤさんの昔の部隊員ですよね？」

「それ以前にお前さんの元同僚じゃねえか。忘れてるなんてことはないよな？」

「ある種同寮という言い方をしてみると面白いかもしれませんがゲンヤさん……………」

「わ、悪かったって！あれについては謝ってるじゃねえかよ細けえなあ」

「もし通信越しに殺傷兵器を当てられたらもうゲンヤさんの顔面に風穴があいてますよまったく」

「相変わらずえぐいこと言うやつだな……………。話を戻すとしてだ」

「そのまま忘れててくれたらよかったのに……………」

「何も聞こえんぞ。で、その八神が今度機動六課って部隊を新設することになってな」

「

「ああ、風の噂に聞く古代遺失物なんちゃらかんちゃらってやつですか」

「やっぱりそっちにも情報入ってるんだな。で、その八神からちょっと六課に人がほしいって言われてな」

「はいはい、それで六課に行く人を一緒に選べばいいんです？」

「違う違う、お前にその六課に合流してほしいと思ってな」

「あゝ、なるほどそういう話ですk……………はあ!？」

「あ、ちなみにもう資料というか一人送る連絡してあるから拒否権はないぞ」

「……………ちょっと今から久しぶりに生のゲンヤさんを見たいなあ……………」

「お、おい。その色の消えた目でおもむろに立ち上がるのやめろ!」

「ゲンヤさんが勝手なことするから……………まあ一応こっちは陸士108からできた分課だから拒否できないですかね」

「やっぱりお前ならやってくれると思ってたぜ!それで、お前デバイス取りに来るのか?」

「こっちとしてはどっちでもいいんですがね……………」

「まあ一応持つていっておいってくれや。こっちにおいておくとギンガが怖いからな」

「ギンガは僕に対して少し過保護気味じゃないですかね?不思議なくらいですよ」

「『デバイスも持たずに出かけてるなんて犯罪者に襲われたらどうするんですか!』って感じだからなあ。愛されてるんじゃないのか?」

「愛されてるととるかなんととるかですがね、ほんと」

「実はお前が六課に行くのにも反対してたんだけどな。『ロストロギア搜索は危険だ』とか言つてよ」

「で、代わりにギンガが自分で行くと言ったけどギンガは108の貴重な戦力だから無理、までは想像できてました」

「そうか。ちなみにいまさら確認するが、副業のほうは差支えないのか？」

「まあ雇われ稼業のほうは仕事が入り次第博士が連絡くれるって言うてたんで、基本は大丈夫ですね。久しぶりに長期の仕事なので逃したくはないんですよ」

「相変わらず大変そうだなあ……………カレンちゃんのほうは出かけてるのかい？」

「……………あいつは相変わらず出かけたままだと思いますよ。もし戻ってきたらギンガに頼んであるんで」

「そうか。なら気にせず行ってこい」

「気になることだらけですが、まあいいです……………」

「行ってきますよ、六課まで」

第1話 0の青年（前書き）

最近本とか読んでないせいかな、もともと駄文だったのに書き方がわからなくなつてさらに駄文化しておりますはい

感想とかくださるとやる気が出るのでちょこつと書いてくださるとうれしいかな……………とか思ってます

第1話 0の青年

「とりあえずデバイスを取りに行った方がいいんですが……………このままだと遅刻は免れませんね」

僕——レーヴェ・J・F・アイレインはどうするかなあと悩みつつ歩を進めている。

今日は新しい異動先、『機動六課』の稼働式とやらがあるらしいのですが、デバイスの最終調整のせいで遅れそうなのです。

「ギンガに見つからないように、というのがまあ一番難関だったんですがね」

そう。実際は、『ギンガに見つからないようにデバイスを回収し、引き上げる』というこの行為が一番の難関だった。

特に会おうと思わなくてもついたり遭遇してしまうこともあるため、結構気を配ってましたよ、ええ。

「まあはやてのことですし、デバイス取りに行ってたって言っておけばたぶん許してくれるでしょう」

ということでのんびり行きましょう。寄り道はしない程度にゆっくりと……………

「遅刻してることは抜きにしても、この資料はちよつとなあ……………」

私——八神はやては、もう何度目かもわからないほどに目を通した資料を再び見つめる。

地上本局……というよりゲンヤさんをお願いして、一人でもいいから優秀な人材がいらないものかとお願ひしたのがついこの間。

ゲンヤさんは必ずしも108や地上部隊から派遣できるわけじゃないと言っていたから、この資料を誰が作ったのかは検討もつかない。だがしかし、この資料はいくらなんでも情報不足過ぎる。

「名前なし、性別なし、魔導師ランクなし。記入されてるのが過去の経歴だけってのがなあ……………」

おまけに、元の配属先は情報課だ。その前は陸士隊にこそなっているものの、情報課出身の人間の場合は六課がリスクを負うことになる。

「レジアス中将の差し金の可能性も否定はできんか……………」

レジアス中将は私やカリムのような希少技能持ちレアスキルのことを快く思っていない。

そんな人間が新設で、しかもオーバースからニアスと強力な力を持った魔導師をリミッターを付けて無理やり押し込んだような部隊を警戒しない手はないだろう。

「でもはやてちゃん、情報課の後に一時休職の後復職って書いてあるけど…」

「問題はそこなんや……………その休職の期間が示されてないってのも何かあるんやろか」

本来なら休職していた場合はその期間を明記しておくものだ。特に魔導師で前線に出なければならぬ場合、久しぶりの実践などということになっては困る事態が発生することもある。

そして何より問題なのは魔導師ランクがわからないことだ。これがわからなくてはロングアーチ配属かライトニング、スターズ配属になるかを決められないのだ。

その時、ドアの向こうから声が聞こえた。

「どないしたん？ 誰かおるんか？」

「……………遅ればせながら失礼します、八神部隊長」

—— 同刻 機動六課 部隊長室前

「ここが部隊長室です」

「ありがとうございます。えっと…「シャルです。機動六課の医官を担当してます」シャルさん」

「どないしたん？誰かおるんか？」

「ふふつ、呼ばれてるみたいですよ、初日遅刻の新人さん」

「ほんとは行きたくないですよねえ……一応八神部隊長とはお互い知り合いなもので」

「あらそうなの？陸士時代の同期とか？」

「そんなものですな。じゃあ私は呼ばれてるので失礼します」

機動六課に到着した僕は部隊調質の場所がわからずシャルルさんにわざわざ案内してもらってたわけですよ。

いやまあ遅刻しておいてなおかつ部屋の場所がわからないなんて恥ずかしい限りですがね。

「……………遅ればせながら失礼します、八神部隊長」

「えっ……………アイレイン……さん……？」

「本日付で機動六課に異動となりました、レーヴェ・J・F・アイレインです。階級は……たしか陸上三佐ということになってたと思います」

「え、いや、あれ？アイレインさんって魔術院継ぐって……………」

「僕は継ぐ気だったんですけど、両親がもう継がないでいいって言っただけですよねえ。」

こっちは管理局やめる手続きまでさせられたというのに、困ったものです」

「え、じゃあなんで休職扱いに「細かいことはまた今度にしましう。ほかの方々がついていけないですし」せ、せやな。改めて、移動を承認します、アイレイン陸上三佐」

「はい。こちらこそよろしくお願いします、八神部隊長」

こんな割と普通に始まった物語が、ある事件を境に狂っていくことを、今はまだ誰も知らない……

第1話 0の青年（後書き）

なんか文章がおかしい感じがしてなりませんorz

まあ書いていけばいい文章になると信じて頑張ります

第2話 魔弓手（前書き）

感想が……………ほしいです……………（白目

まったりペースで書いていきますけど、感想いただけるとモチベに直結します

あ、ちなみにくゝは通信、は念話による会話となっております。

第2話 魔弓手

—— 早朝 機動六課 トレーニングルーム

——アイレインさんは新人訓練と基本的にはロングアーチの仕事を手伝ってもらえばええかな

という八神さんの鶴の一声によって、なぜか新人訓練を担当することになってしまいました。

「えつとですね……じゃあ新人の皆さん、高町隊長とヴィータ副隊長の補佐として頑張ってくださいますので、よろしく」

「……はい!!」「……」

新人のみんななどの挨拶も済んだので、しばらくは高町隊長たちの訓練を拝見させていただきますかね。

<みんな聞こえる?>

「聞こえてますよ、隊長」

<アイレインさん、隊長じゃなくて名前で呼んでって言わなかったっけ?>

「さすがにいきなり女性を名前で呼ぶのはつらいところがありましたですね……それより訓練はじめないと」

<うん、じゃあ訓練はじめるよ！まずは8体くらいからかな>

「動作レベルC、攻撃精度Dくらいでいいですかね？」

<そんなところかな>。みんな、私たちの仕事の目的はわかってるよね？>

「えっと……搜索指定されたロストログアを搜索して保守、管理することですよね？」

<うん、ティアナ正解！そのために私たちが戦うのは………>

高町隊長がそこまで言うと、シャーリーさんとなのはさんが完成させた訓練用シミュレーターが楕円形状の機械を作り出した。

「自律型の攻撃魔導機械、通称ガジェットです。近寄ると攻撃してくるタイプで、攻撃力はなかなかですよ」

<最初の訓練は、逃げ回るこのガジェット8体を全破壊もしくは捕獲。制限時間は15分ね！それじゃあミッシヨンスター！>

ということで、新人たちの初めての訓練が開始されましたとさ。

—— 10分後 機動六課 トレーニングスペース ビルの上

「みなさん動きいいですねえ……これはまだまだ伸びそうですね」

「動きがいいとは言っても、まだまだ隙だらけだけだな」

ビルの上に座り込みながら新人たちの訓練の様子を見てみると、隣にヴィータ副隊長が来た。

「まあたしかに、まだまだ長所短所を理解していない感じは否めな
いですね。本能的に長所を生かしているようには見えますけど」

「ま、まだまだ新人ってことだな」

「ヴィータ副隊長は訓練には参加されないんですか？」

「私はもう少しあいつらがまともになってから参加だ。あとその副
隊長っていうのやめねえか？なんか階級上の人間に言われると薄
気味わりい」

「さつき高町隊長にも言ったんですけど、さすがに初対面に近い女
性呼び捨ては難しいですね。僕がヘタレなのもあるとおもいます
けどね」

「でも私にはタメ口でいいっていったじゃねえか」

「それはそれ、これはこれですよ」

というか、普通女性って名前呼び捨てしてもらって抵抗あるん
じゃないのですかね？

私の勘違いなのでしょうか。

「そういえばアイレイン、お前ってはやての知り合いなのか？」

「昔ゲンヤさんの下で少しだけ、ですけどね。まあお互い置かれて
る状況は違いましたけど」

「へえ」……………あ、やっぱり新人たちはAMFに苦戦してるみたいだな」

「AMFですか……慣れてない新人たちには厳しいかもしれませんね」

「まあティアナが指示とってるみたいだから、すぐに終わるだろうけどな」

僕がそう言ったときには、AMF2体がキャロのブーストを受けたエリオの攻撃とティアナとスバルのコンビネーションで撃破されていた。

「ヴィータ副隊長の予想通りになりそうですね」

そんなことを言っている間に、残りの6体も順々に破壊されていた。

「じゃあ次は、アイレインさんにお手本見せてもらおうか!」

「お手本ですか……って僕ですか?」

正直僕は手本を見せられるような戦い方はできないんですけどね……困ったものです。

「そついえばはやてちゃんがもらった資料に魔導師ランク書いてなかったみたいけど、実際のランクや魔力量いくらのの？」

あれ？もしかしてそのあたりの情報八神さんから伝わってないんですか？

「もしかして知らないのかもしれませんが、私魔力量ほとんど0なんですよね」

「『『『『『『ええっ！？』『』『』『』『』』」

あちゃー、やっぱり知らなかったんですね。

「僕、リンカーコアはあるんですけどほとんど魔力がないんですよ。だからデバイスとかから魔力供給受けてるんですよ」

「デバイスから魔力供給？」

高町隊長が興味深そうに聞いてくる。とはいってもこの件に関しては特秘事項に近いし、あの件がばれるかもしれないんで答えられないんですが。

「特秘に少しかかってしまつてあまり詳しく答えることはできないんですけどね、残念ながら」

「じゃあ、なんで左目に眼帯してるんですか？」

今度はナカジマ二等陸士が、僕の左目にまかれている眼帯について聞いてくる。

「昔ちよつとした事故で目を悪くしてしまいましたね。それ以来眼帯つけてるんですよ」

「へえ」

「ささ、質問はここまでにしてお手本お願いしよっか！じゃあアイレインさん、お願いします」

「僕一応バックなんですけどね……ま、いいか。『フェンリス』起動」

僕がデバイスを起動すると、僕の手に表示したのは漆黒に塗られた『弓』だ。

「アイレインさんの武器は弓かあ。魔導師で弓使ってる人ってほとんどいないんじゃない？」

「確かにほとんどいないみたいですね。実際僕のこの弓も特注品なんですよ」

そう言いながら僕は開始地点に立ち、フェンリスにカードリッジを装填する。

「それじゃあ始めるよ！数と動作レベルはどうする？」

「数は適当でいいですよ。動作レベルは最高にしたほうが手本になりますかね？」

「じゃあ数は50、動作レベルは最高ね。それじゃ、ミッションス

ターゲット!!>

高町隊長の掛け声とともに、目の前の空域に50体のガジェットI型が姿を現す。

僕は適当な高さのビルに目を付けて、ビルの屋上から屋上を飛び移ってそのビルに上る。

<アイレインさん、空戦は苦手?>

「やっぱり自分の魔力じゃないので、できることなら飛ぶのは勘弁したいところですよ」

ビルの上に立ち、ガジェットに向かって弓を引き絞り……………放つ。その一度の動作で、弓の射線上にいた8体のガジェットが同時に爆散した。

「砲撃でもないのに8体も1回の攻撃で……………」

「ねえティア見た!?今の攻撃すごい速さじゃなかった!?!」

「1体目と8体目がほぼ同時に爆発したわよね……………それにAMFなんてお構いなしだったし」

新人たちのほうから、高町隊長も含めた感嘆の声が聞こえる。

うん、すごいって言われるのはうれしいですごく。実際大したことはしてないですけども。

とりあえずささっと片づけてしまえますかね……………

「アイレインさんってすごいんですねー！私びっくりしちゃいました」

「こらスバル！食べながらしゃべるのははしたないわよ！」

「でも、確かにアイレインさんすごい腕でしたよね」

「いや、僕は大きすぎてくなくいですよ。それこそなのはさんたちのほうがよっぽどですよ」

訓練を終えた僕たちは食堂で昼食をとっている。

ちなみに呼び方が名前になったのは、さっきはやてさんが

「そっか、アイレインさんはそんなに減給してほしいんか」

と恐ろしいことを言っていたからですよ。

さすがに減給されたら厳しいですよ！おもに生活が！

まあそんな脅しめいたこと言われたらさすがに名前で呼ばざるを得ないので、さん付けで妥協してもらうことにしました。

「僕は自分の魔力が使えないので、空を飛ぶのも避けたいし、あまり複雑な魔法も使いたくないんですよ。お恥ずかしい限りですが」

「だからフルバックをやってるの？」

「そうですよ。遠距離狙撃と支援射撃ができればある程度は務まり

ますからね」

そう言ったとき、僕の通信端末から着信を伝える音が鳴る。
この着信音は……………

「すみませんのはさん。ちょっと別稼業の方の仕事が入ったんで、は yet さんに伝えておいてください。上からの連絡は言っており、と思っで」

「あ、ちよつと！？アイレインさん！？」

今日から本格的に活動が始まったっていうのに、こんな時からお仕事入れてくるとは。

「まったく、ドクターも困った人です……………」

第2話 魔弓手（後書き）

とりあえず2話まで書いてみました

最後のセリフでお分かりかもしれませんが、次回はあの方々が登場
されます。

第3話 日陰の科学者（前書き）

割と更新間隔短めでの更新となります

じきに長期休暇が明けてしまうので、そうなると更新頻度も落ちますがしっかり更新したいと思います。

……感想ほしいな（チラッ

第3話 日陰の科学者

六課離脱2時間後 無人世界『シエルカ』 J・S研

研究所

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーんですよ、スカリエッティ」

「またなかなか古いネタを引っ張ってきたじゃないかジーク」

うん、まあ古いつていうのは理解してますよええ。

せっかく登場シーンにネタを織り込もうと思ったのにそんな反応はなしでしょ、悲しくなります。

「で、どうしてわざわざ私を呼んだんです、クライアント依頼主殿」

「君の仕事モードへの切り替えの早さは相変わらずだね。実は僕もネタを仕込もうと思っていたのに」

「それなら僕が登場したときにしてくれればいいんですよ」

まあ名前で見かると思いますが、ここはジェイル・スカリエッティ博士の研究所。無人世界にあるのは彼が次元犯罪者であるからなのだが……………

「でもジーク、君は管理局の人間でもあるのだろう？次元犯罪者の依頼なんて受けても大丈夫なのかい？」

そう、問題はそこである。

「本来、次元犯罪者は僕たち管理局が逮捕しなくてはいけない対象であり、決して依頼を受けるなどといった関係ではない」

「ましてや、今の僕たちのように互いの利益を通してでも信頼し合う関係になることなどあり得ない、だろう？まさか僕も管理局の人間が入り込んだとは思ってなかったよ」

入り込んで、とはひどいいい方だ。まるで僕が管理局から送られたスパイのようじゃないか。

別に僕はここで手に入れた情報を管理局側に流すつもりは微塵もない。ましてやジェイルを売るなど、僕は絶対にしない。

それくらいの信頼を、僕はスカリエッティに寄せている。なぜなら、僕は彼から大切なものを預かっているから。

「依頼主の情報を管理局に持ち込むなんてことはしませんよ。それに僕はジェイルから『フェンリル』を預かってる身ですし」

「特殊型ロストロギア『フェンリル』……あれは既に君のものだよジーク。そもそもあれは君が僕のところを持ってきたものだろう？それに君にしか扱うことができないものじゃないか、あれは」

「もし僕しか扱うことができないロストロギアでも、これはジェイルの依頼の最中に手に入れたものですから。依頼の最中で入手した戦利品は依頼主に所有権があると考えるのがこの稼業なんですよ」

何でも屋……というか、こんな雇われ稼業をやっている人間なら基本はそうだ。

そもそも十分な報酬をもらって依頼を受けている以上、戦利品まで奪おうとする者はこの稼業をやる者の中にはいませんよ。

「なら、僕は友人として君に『フェンリル』を譲るとするよ。大切に使ってくれよ、ジーク」

「そう言われたら、ジェイルの友人としては受け取らざるを得ませんね。続けて使わせてもらいますよ」

このロストログアのおかげで、今の僕があるといっても間違いではないんですから。

「それで、わざわざ僕を呼び出してどうしたんです？この間の研究所については情報収集は十分だったと思いますが」

「ああ、その件に関しては十二分に情報が集まってるよ。それに君から突っ込みすぎるなと言われてるからね」

「それじゃなかったらなぜ突然？しばらくは管理局側の仕事で忙しいって言ったと思うが」

「その管理局について、頼みごとがあるんだよ。とある部隊のことについて調べてほしい」

「とある部隊？」

「そう。その部隊の名前は……………」

動六課だよ」

機

「なぜ、機動六課について調べるんです?」

「そんなことを聞く必要があるのかい? 今までは大して理由も聞か

ずに依頼を受けてくれたというのに」

「わかっているとは思いますが、管理局で部隊について嗅ぎまわるのは僕にも危険が伴います。ましてそれで確保されてしまえば、最悪ジェイルやナンバーズたちにも被害が及ぶ。それだけは避けたいんです」

すべて事実であり本心である。僕は管理局側の人間だし、ジェイルが違法研究に手を染めているのもわかる。それでも、友人としてはジェイルが捕まるというのはやはり喜ばしいものではない。

「……悪いね、そこまでは考えてなかったよ。すまない」

「いえ、私が勝手に心配してるだけですから」

「ドゥーエからの情報だね。機動六課というのは、『いずれ来たるべき陸士部隊の全滅と管理局の管理システムの崩壊』の対策のためにつくられたのではないか、とのことだね」

「それで機動六課がジェイル達の計画への障害になりうるである、と考えているんですか？」

「……………たしかに、聖王教会のカリム・グラシア少将の希少技能^{レアスキル}ならそんな予言を行うことができるとは聞きましたが。」

「……………なるほど。まあ私が調べるようなことはないですね」

「ん？それはどういう意味だい？」

「ジェイルには言っていないんですけど、僕今機動六課所属なん

ですよ」

「ほう……それなら情報だけなら今すぐにだけでも調べられるというのかい」

「ですがね、さすがに依頼主とはいえ局の詳細情報を渡すのはいけないと思うんですよ」

「つまり、簡易な質問程度なら答えないこともない……というのが妥協点かな？」

「ご明察。さすがはジェイルです」

ジェイルは物わかりがいい。それにこちらのこともある程度考えてくれているから、こう言えば下手に追及してくることはない。

「じゃあ簡単な質問にしようか……プロジェクトFの残滓とタイプゼロがいるという情報は事実かな？」

「……すみませんジェイル、それでは誰が誰だかわかりません」

「そうだった、君はそのあたりについてまだ知らないんだっただね。忘れていたよ」

結局ジェイルが局について質問してきたのはこれだけですか。

ですが僕の知識なしで依頼主の役に立たないというのも癪な話です。

「……仕方ないのでジェイル、追加料金なしで依頼を一つ受けてあげましょう」

「ん？突然どうしたんだい？」

「だから、今回の件に関しては僕の知識不足が問題ですから。代わりに一つやってあげますよ……………聖王教会、カリム・グラシアを直接尋問、もしくは誘拐、最悪拷問します」

「な！？そんなことしたら君の立場が危うくなるじゃないか！そこまでする必要はないだろう！？」

「大丈夫ですよ、心配しなくても。それよりジェイル、今日はナンバーズたちは？」

「心配しなくてもとはいっても……………今は訓練中だよ。君が来ると言ったら、なんで昼に食事をとったのかって悔やんだよ」

「今回は食事時に来れませんでしたからね……………次回からは食事時に来た方がよさそうだ」

何故だか知らないですが、僕はここに来るとよく食事を作る。ナンバーズのみんなは美味しいと言ってたくさん食べるから、作る側としては最高の環境ではあるんですけどね。

「じゃあ今回はこれにて。カリム・グラシアの件については次のメソンのときまでには」

「今日はフェンリスヴォルフのメンテナンスはいらなかな？君の使い方はなかなか派手だから、すぐフレームがダメになるからね」

「今日は大丈夫ですよ。ではこれで」

さてさて、明日にでも聖王教会に行きますかね………

第3話 日陰の科学者（後書き）

いきなり主人公がジェルサイドに落ちそうですが、さすがにそんなことはないと思いますw

《次回予告》

自らが発案したカリム・グラシアへの直接の尋問

「カリム様に会いたいという方が……」

「初めまして、カリム・グラシア少将」

「貴方、一体何をつ！？」

「黙っていていただく。騒がなければ命はとりませんから」

「管理局の人間がなんで……」

彼は心を殺して任務を達成することができるのか

次なる話へ、テイクオフ！

第4話 生きるための稼業

ベルガ自治区 聖王教会 執務室前

Side Carim

「カリム様にお会いしたいと言う方がおられるのですが……」

「来客ですか？ですが今日はそういう予定はなかったはずですが」

「アポイントメントはないと言っておりましたが、『希少技能の内容について』といえばわかるとおっしゃっておられました」

「っ！？……とりあえず、ここまで通してください」

「わかりました」

私——カリム・グラシアは間違いなく動揺していた。

管理局でも三提督にクロノ執務官、リンディ総括官、あとははやてしか知りえないはずの情報……それを知っている人間が、わざわざ会いに来る。

そのこの意味を見いだせずにいると、客人が部屋の前に来たことを示すノックが響いた。

「初めまして、カリム・グラシア少将」

そう言いながら執務室に入ってきたのは、管理局の制服の上から黒色のマントらしきものを羽織った青年。左目に眼帯をしているが、それでもわかるほどには端麗な顔立ち。

そしてこれもまた眼帯のせいかもしれないが、何も感じ取れない

表情をしていた。

「僕……自分は管理局古代遺物管理部機動六課所属の、レーヴェ・J・F・アイレイン三等陸佐であります」

「……初めまして、私はここ聖王教会で騎士をしているカリム・グラシアです。どうぞ、椅子におかけください」

最初の挨拶からだけでもにじみ出る、その青年への不信感。

『不気味』——それが、私の彼への第一印象だ。

年ははやてたちより少し上くらいだろうが、この青年は明らかに彼女たちよりも場数を踏んでいる。

「……少しこの方と二人で話したいので、あなたは下がってくれてかまいませんよ」

青年の狙いがわからないからこそ、敢えて私は入口に待機していた騎士を下がらせた。

もし青年が何らかの動作をとったとしても、この執務室にはそれに対応できる程度の設備はある。

何かあったとしても、シャツハあたりが来るまで時間を稼ぐことくらいはできるだろう。

——そんなふうに甘く考えていた私は次の瞬間には、男に口を塞がれ机に押し付けられていた。

今の私の状況を簡単に説明しよう。

両手足にバインドをかけられて椅子に拘束され、執務室のカーテンは閉め切られ、正面には鈍色の光を放つ質量兵器——銃を持った青年が立っている。

……………油断もあつたが、この青年はただの魔導師じゃない。

その証拠に、事前に魔力が感知された時のためになるはずだった危機感知信号が一切の反応を示さないのだ。

いくら短距離^{ショートジャンプ}高速移動とはいっても、魔力が一切検知されないなんてことはありえない。

「貴方、一体何をつ！？」

目の前で銃を構える青年に問いたです。

私がここまで強気に言えるのも、彼はまだ私を殺すつもりはないと思えるからだ。

殺すつもりならさっきの一瞬で終わっていたはずだから。

「黙っていていただく。騒ぎさえしなければ命はとりませんから」

「管理局の人間が、何でっ……………」

「いえ、ちょっとだけ用事がありましたね」

そういうと青年は、私の机の中から一冊の本を取り出す。

その本は、これまで私のレアスキル『プロフェーティン・シュリフテン予言者の著書』によって記されてきた予言の書のようなものだ。

「わざわざ身の危険を冒してまでここまで来て、なおかつ貴女のよ
うな女性を腕ずくで拘束したのには当然訳があります」

そう言いながら彼は本のページをめくり、あるページで止める。

「そのページは……………」

「貴女の一番新しい予言のページ、ですよね？」

そう言いながら彼は私が読めるような向きに本を置き直し、その本の内容を読み上げる。

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は碎け落ちる……ですか」

「貴方、古代ベルカ語を読めるんですか!？」

「まあそのあたりは多少は、ですけどね。なぜ読めるのかは僕自身わかりかねますが」

そう言いながら彼は、ページをめくる。

そこに記されているのは、はやてたちにさえまだ伝えていない予言。

その時復讐の輪廻が目覚め、船の守護者より解き放たれる

罪を背負いし断罪者が、凶つ鳥とともにその牙を世に向けるとき

法の守護者が法を崩さんと動く

「これは………」

青年は何かに驚いたかのように右目を見開く。

「………今回貴女のところにわざわざ来た理由ですが、貴女たちのこの予言についての解釈が聞きたかったんです……が、ここまで予言が出ているとは思いませんでした」

そう言いながら青年は私の隣まで歩いてくると、ちょうど私の額の位置に銃口を向ける。

「残念ながら、貴女にこれ以上生きていられると何かしら不利益を生むかもしれませんので」

そして少年は、引鉄にゆつくりと手を伸ばす。

「いやっ……まだ……死にたく……ないっ……!!」

本来なら見せてはいけない弱い部分も、自らの命の危機を前にしては簡単に出てくる。

敵を前にして情けないと感じるより先に、自らの生に対する渴望がにじみ出る。

意識もしないのに涙が目からあふれ出て、頬を伝う。
体を支配するのは、圧倒的な死に対する恐怖。

「それじゃ、さよならですかね………」

こんな……こんなところで、何も成せないまま……私は……

「——なんて、冗談ですけどね。騎士カリム」

彼が引鉄を引くことで執務室に鳴り響いた音は、彼の手に持っていた銃型のクラッカーの炸裂音だった。

Side Eyerein

「ですから先ほどまでののは冗談ですと……そんなにへそを曲げない

「でくださいよ、騎士カリム」

僕は執務室にあったティーセットにお茶を入れてカリムさんの前に置くと、最初にあてがわれた椅子に座った。

「まあ普段聖王教会の代表としての姿の騎士カリムからは想像もつかない姿が見られたのでいいんですが」

「そ、そのことはもう忘れてくださいっ!!」

カリムさんは恥ずかしそうに顔を赤く染めながら、ふくれっ面で言葉返す。

聖王教会の代表としての姿しか見たことのない僕にとっては、こういう人間味のある姿は非常に貴重である。

「でも、なぜ貴方が私の希少技能とその予言内容を知っているのですか？局内でも知っている人間はほとんどいないのに……」

当然カリムさんの疑問はそこに向くだろう。

本来なら僕のようなただの局員には知りえない情報なわけですから、下手をすれば門外不出の情報を誰かがリークしている、ということにもなりますからね。

「ジェネシスメモリーズ……原初なる記憶について、騎士カリムはどのあたりまで知っておられますか？」

「原初なる記憶……ジェネシス・シャフトたしか、古代ベルカ時代から存在しているとされる魔道書『ジェネシス・シャフト原初の根幹』に記された未来の出来事を示す記述、でしたか」

「さすが騎士カリム、理解が非常に深いようで安心しました」

「しかし、それと今回の件とでいったい何の関係が……………」

「一部は特秘事項にあたりますので、強いて言うならば私の希少技能に近い能力に『原初なる記憶を使役する』力がある、とだけ」

「原初なる記憶を使役……………ほぼ確定に近い未来予知を行うことができる、と？」

おっと、どうやらいい方が悪かったみたいですな。

「いえ、私の力はそこまで正確なものじゃないんです。せいぜい今後起こりうるである事象を断片的に知りうる程度なんですよ」

「その中に、今回の私の予言があった……………ということですか」

ご明察である。

この能力、詳細を言うことはできませんが未来について部分的に知ることができる、という非常に役に立つかわりにくい能力です。

今回わざわざ危険を冒してカリムさんに詰問したのも、この力でちよつとだけこの件について知ることができたからっただけなんですよな。

「そのためにわざわざあんなことをしたのですか？」

「そうでもしないとアポも取れない一般佐官が騎士カリムにお会いできるわけもないですし、予言の内容について聞くこともできな

ったでしょう?」

「……まああなたが間違っではないですね」

一応カリムさんから彼女たちが考えている解釈については聞いた。
この予言が表している重要事項は、『聖王、およびゆりかごの復活』
、『地上本部壊滅、管理局システムの崩壊』だということも確認で
きましたし。

ジェイル側に入っている情報は正しいものでしたか。

その後しばらくは雑談をして、日が沈み始めているのを確認した僕は席を立った。

「じゃあ、今回はこのあたりで失礼します………と、そうだった。
騎士カリム、できれば今日の件は他言無用でお願いできますか?」

これはさすがに無理でしょうか。いくら未遂とはいえ、少将であり
教会代表に無礼を働いたわけですし。

「……じゃあ、交換条件をだしましょう」

「交換条件? まあ八神さんたちにばれて首飛ばされないわけですし
多少でしたら」

「じゃあ………貴方の連絡先を教えてください、ジークさん」

「………は?」

自分でも何とも間抜けな返事だとは思いますが、仕方ないでしょう?

命を奪うとか言ってた相手の連絡先を聞く魂胆がわからない……………

「く、口止めするんですから、私の愚痴を聞く相手くらいにはなつて下さいよ！」

つまりは、暇なときに愚痴を聞いたり世間話する相手になれってことでしょうかね？

……なんとまあお安い御用な仕事じゃないですか。

「ふふつ、わかりましたよ。では騎士カリム、また次の機会に」

「ええ、ジークさん。次会う時は騎士カリムではなく、カリムって呼んで下さいね」

「……………善処させていただきます」

僕はそう言い残すと、そそくさと退散して六課に足に向けた。

「ジーク……………何とも不思議な人でしたね。なんというか、ほかの男性からは感じない何かを感じました……………」

騎士カリム、その気持ちがいわゆる恋心というのに気づくのは、
まだ先の話である……

第4話 生きるための稼業（後書き）

まさかのカリムがアイレインに恋心を抱いちゃうラストです

キャラ的にはカリム好きなので、くつつけちゃうのも普通にありだ
と思うんですよはい！

まあしばらくは序章的な感じで他キャラとの接触を続けてアグスタ
くらいまで行くと思われます

《次回予告》

「アイレイン、私と模擬戦をしろ」

「一応弓以外にも使えるんですけどね、苦手なんですよこっこの」

「消え……た……！？」

「アイレインさんってショートジャンパーなんですか？」

「僕も、僕自身がよくわかっていないので」

次なる話へ、テイクオフ！

第5話 炎剣と魔弓（前書き）

とりあえず5話目をば

戦闘描写は苦手なので、いろんなラノベやら何やら読んで勉強しておりますがよくわかりませぬ

精進しなくてはいいけませんね
ちなみに【】はデバイス音声です

第5話 炎剣と魔弓

聖王教会突撃翌日 機動六課 トレーニ

ングスペース

「やるならやるで頑張るしかないですね。よろしくお願いします」

「ああ。こちら主の知り合いというお前のお手並み、拝見したかったからな」

シミュレーターによってつくられた市街地に、僕とシグナム副隊長が向かい合って立つ。

僕はその手にフェンリスを、シグナムさんは剣状のデバイス『レヴァンティン』を構える。

「では……いくぞっ!!」

どうしてこうなったかというと、少し前に時間をさかのぼらなくてははいけませんね。

30分前 機動六課 部隊長室

「じゃあ、シグナムと模擬戦してもらおか」

「シグナム副隊長と模擬戦……………ですか？」

昨日の聖王教会突撃を終えた僕が八神さんに報告しに行ったら、八神さんが唐突にこんなことを言ってたてきました。

「せや。私としてもアイレインさんの今の腕を確認しておきたいし、新人たちにもいい影響があると思うんや」

「でも、フルバックの僕とフロントアタッカーのシグナムさんでは勝負にならないんじゃないですか？それに八神さんは僕の大体の戦い方は知ってますよね？」

僕と八神さんは同じ部隊だった時期もあるんですし、僕の戦い方がわからないわけがないでしょうに。

「そりゃ一時期私の背中を守ってくれとったんやから、わからんことはないわ。アイレインさんは確か剣も使えたようなきがするんよ」

……………やっぱり覚えてたんですか。一時期フロントアタッカーが足りなくなっただからやった程度なんですけどね。

「僕の接近戦の腕はシグナムさんどころかエリオやスバルにも及ばないレベルなんですけど」

「そりゃあ近接重視のメンバーに勝つのは難しいやろうけど、昔の追い払う剣捌きなら勝負になるんじゃない？」

……………昔のことを知ってる人って厄介ですね。

「はあっ!」

シグナムの剣戟が、シミュレーターで作られた道路を裂きながら迫る。

僕はそれをぎりぎりで避けながらシグナムさんの足元に矢を撃ちつつ後退する。矢は確実にシグナムさんの立っていた大地を穿つも、シグナムさんもすぐに飛び退っているため矢は当たらない。

「やはり寄られると厳しいですねっ!」

【サウザンドアロー】

僕の周りに1000本にも及ぶ矢が浮かび、シグナムさんに向けて放たれる。

だがシグナムさんは近距離戦に特化した騎士、この程度の攻撃はスビードだけで避けられる。

でも、こちらにはこれ以外に効果的にダメージを与える手段がないというのがありますが。

まあ隠し玉あるとはいってもシグナムさんに確実にダメージをとれるわけではない。

(気乗りはしませんが、そうでもしないと勝てないでしょうね……)

正直なところ、たかが模擬戦の一度や二度、負けてどうこう感じるほど子供じみた執着心は持ち合わせてはいない。

でも今回は新人たちも見ているわけで、無様に負けるといふのはさ

すがにないかな、と感じている。
なら、やるしかないのでしょうか。

「飛龍一閃!!」

サウンドアローで巻き起こった煙から唐突にシグナムが放つ衝撃が飛来する。

僕はそれを矢で相殺すると、剣士であるシグナムに対してこちらから『一步踏み込む』。

「なっ!?!だが!」

こちらの動作に一瞬シグナムさんは怯むが、即座に横風ぎにレヴア
ンティンを振るう。その斬撃は何もしなければ確実に僕の首を捉え、
刃引きされていなければ僕の首を刎ねるだろう。

僕はその刃を、弓で受けとめる。
生憎僕のフェンリスはこの程度で折れるほど安くてはいない
でね。

「なんだと!?!」

「この距離でよけることはさすがにできませんよね」

【スレイプニル】

フェンリスから放たれる神速の矢が、シグナムを穿つためにゼロ距離で弓から放たれた……

——同刻 機動六課 観戦スペース

「シグナムが近距離で押されてる……？」

私の隣で、フェイトさんは愕然としたように呟いている。

「フェイトちゃんとも互角に渡り合うシグナムについて……」

……」

私——スバルは、目の前で起きた光景に何も言葉を発することができない。

隣のティアやキャロ、エリオも目の前で何が起きたかを、理解できていないといった表情で見つめている。

私たち4人で戦っても勝てないシグナムさんに、フルバックのアイレインさんが速さでもついていっている。

「アイレインさん……すごいなあ………」

私は特に意識もせず、ただただそんなことを呟いていた。

「やるなアイレイン……今のは効いたぞ」

巻き起こった爆風の中から、額から血を流したシグナムが姿を現す。どうやらあの距離でのスレイプニルの直撃を、刀身をスレイプニルにぶつけて弾道をそらすことによって回避したようだ。

「まるで化け物ですね……ある程度自信はあったんですが」

「自信があるといった割には、まだなにか隠し持ってるようだが？」

「やっぱりばれてましたか……まあ弓で斬撃を受け止めた時点ではれた可能性は高いですね。」

「隠し持ってるわけでもないんですが、出し惜しみもできないので使わせてもらいますよ……『フェンリスヴォルフ』」

瞬間、僕の手握られたフェンリスは、銃と剣が一体となった姿……いわゆるガンブレードに変化した。

これが八神さんの知っている僕の前衛戦闘のために作られた第二形態『ヴォルフ』……遠距離戦用の形態フェンリスに対して、ヴォルフは近距離戦を想定して作られている。

「銃剣か……面白い」

シグナムは言葉を発するとともに、今まで以上に目を細める。もはや殺気ともとれるほどの圧倒的な覇気を放ちながら、僕の一挙手一投足を見逃さないかのようにこちらを見つめる。

「いきます……………」

そうして、最終ラウンドの幕が開かれる……………

「甘いぞ!!」

「くっ!!」

その切っ先が触れ合い、鏝迫り合いとなる。

シグナムさんの力は僕よりもあるだろう。普段後衛しているような人間に負けるような腕力ではないだろうと踏んだ僕は、切っ先で銃弾を爆発させ距離を離し、今度はこちらから踏み込む。

シグナムの腹部を狙った高速の突きを彼女は払っただけでいなしてその勢いのままに踏み込んでくる。それを防ぐために敵の前に弾丸を撃ち込んで飛び退く。

「飛龍一閃!!」

飛び退いた先にシグナムの剣閃がはなたれ、横によけざるを得なくなる。

飛び乗ったビルにシグナムは既に狙いを定めている。

（このビルに乗る必要性はないですね）

「フェンリス!!」

ヴォルフをフェンリスに変え、飛び乗るはずだったビルに矢を放ち、崩す。

「アイレイン、貴様ビルをつ!？」

「ヴォルフ!」

再びヴォルフを構えた僕は、崩れたビルのかげらを足場に、シグナムに正面から踏み込む。

シグナムとの距離は十分。お互いが最高の力を放つには十分猶予のある距離。

つまり、お互いがこれを最後の打合いだと理解している、ということだ。

「勝負だ……………!」

View Signum

アイレインはあえて十分に余裕のある距離からこちらに正面から踏み込んできた。

つまり、やつにとってはこれが最後の一撃なのだ。

（私ももう余裕はないな……………）

私がアイレインからもらったゼロ距離での一撃。ギリギリでよける

ことはできたが、それでも脳を揺さぶるのではないかと思うほどの衝撃が伝わってきた。

間違いない……あいつは、アイレインは強い。下手をすれば高町やテストロツサを超えるかもしれない強さだ。

だからこそ、そんな男との純粋な戦いを楽しんだからこそ、私はもう何も考えてはいない。

「この勝負は勝ち負けで争うものではない……だからこそアイレイン、貴様に勝つ！！レヴァンティン！！」

【エクスプロージョン】

私の叫びとともに、カードリッジに残された薬莢をすべて吐き出す。正真正銘、最後の一撃。私の全身全霊を込めた、今放てる最高の一撃。おそらく今まではなってきた斬撃の中でも、最高の一撃。

それを目の前にいる男が誘い出したのだ。最後の一瞬まで心が躍って仕方ない。

「「紫電……………」」

互いの構えは同じ。既にお互いのデバイスから放つ魔力で、周囲のビルは軋みを上げている。

その中に、まるで鏡のように同じ鏡で踏み込みあう二人。そして、放つ。その斬撃を。

「 閃！！！！！！！」

二人が打ち合う光景は、まるで絵画のような美しさであったという
.....

目が覚めたとき、そこが医務室であるというのはすぐにわかった。体の節々にわずかながら残る痛み、そして彼女の隣にある折れた剣が、私に教えてくれる。

「私は……………負けたのか……………」

私の横にあるのは、最後の一回で折れたレヴァンティン。この程度の損傷ならすぐにも直せるのだが、今はまだ直したくないとなぜか思った。

悔しさが無い。テストロツサと行う模擬戦では、負ければ悔しかったはずだ。だがそれがない。

代わりに、勝ったときに感じる満足感が、なぜか体を包む込むように広がっていた。

最後の一回あたりの記憶はあまりない。覚えているのは、眼帯を外したアイレインの顔と、眼帯の奥から姿を現した禍々しき紅の瞳。そして、打ち合った瞬間のあの昂揚感。

その後まっさかさまに地上に落下していき、気づいた時にはアイレインに抱きかかえられていた。

「……………思い出したらなんとも恥ずかしくなってきたな／＼／」

彼に抱きとめられた時の感触がいまだに残っている。しっかりと体つき、彼の匂い、そしてその胸の中でそのまま眠りについてしまふほどの安心感。

思い出すだけで体が熱くなるのを感じる。今までには感じたことのない、新しい感覚だ。

「あ、シグナムさんおきたんですか？」

「あつ、アイレイン!？」

驚きのあまり頭から蒸気が出てしまいそうなほどに体が熱くなったのがわかる。

も、もしかしたらさっきのつぶやきも聞かれていたのか……………？

「起きたときに渡そうと思って飲み物を買って行ったんですけど、ちょうど起きたんですね。これ、どうぞ」

「あ、ああ。ありがとう」

彼から手渡された飲み物を、枯れた喉に一気に流し込む。

「一気飲みとは豪快ですねえ……………それだけで足りますか？」

「いつ、いや……………その……………」

「僕の飲みさしでよければこれどうぞ。僕さっき少し飲んだので、あとはシグナムさんにあげます」

そう言いながら私の手に飲みかけの飲み物を渡すアイレイン。

これはつまり……………その……………間接…………… / / /

だ、ダメだ！これ以上考えてはいけない！！

「しかし、やっぱりシグナムさん強いですね。もうこんな模擬戦したくないくらいですよ」

「私を打ち負かしておいてよくいうよ、お前は。レヴァンティンま

で折ってくれたしな」

「まああれは僕のデバイスが特注品つてのもあるんですけどね。最後の紫電一閃、僕の腕が折れるかと思いましたよ」

あとでアイレインに聞いたことなのだが、最後の一合の余波は観戦スペースに届くほどのものだったらしい。もしリミッターを解除していれば、下手すればトレーニングスペースは消失していただろう。

「あれほどの剣捌きを持つお前が後衛とはな……前衛としては後衛に接近戦で負けるとメンツが立たないんだが」

「いえ、シグナムさんがリミッターありであそこまで戦えただけでも十分化け物だと思いますよ」

その言葉に、何か含みを感じた。

だがそれには別に悪意や蔑意は感じない。だからこそ、彼に聞いてみた。

「どういう意味だ？」

そう聞くと、彼は何かを考えるような仕草の後、静かに口を開く。

「……以前隊員の皆さんに、僕の眼帯は目が悪くしたからと言っていたんですけど……ごめんなさい。あれ、嘘なんですよ」

彼はそういいながら、静かに左目にまかれた眼帯を外す。そしてその奥からは、あの時と同じ紅の瞳が姿をのぞかせた。

「嘘？」

「僕のこの眼帯の意味。いくつかあって話せないのもあるんですが、シグナムさんだけに一つ教えます……この眼帯は、僕の魔力を抑えるためのロストロギアなんです」

「ロストロ……ギア？」

「はい。このロストロギアの名前は『フォーリングベル』。所持者の魔力を奪い取り、保存するロストロギアです。生憎これ自体にはロストロギアとしての力はないようなもので、ロストロギアを探すサーチャーにも引つかからない優れたですよ」

魔力封じ……アイレインは確か、自分はほとんど魔力を持っていない、といった。

彼が普段自ら魔力を生成できないのは、その眼帯のせいなのだろう。

「模擬戦ではついつい気が乗りすぎてしまつて、最後に少しだけ外してしまつたんです。申し訳ありません」

……つまりアイレインは魔力を封じ、さらに弓を持った状態で私といい勝負できていたということか。

「とんでもない化け物だな、お前は」

「いや、僕がシグナムさんの戦い方を知ってただけです。最後の一闪も、シグナムさんの一闪に憧れて練習したんですよ」

「なるほど……通りで予備動作まで同じわけだ」

私は、ここに来るまでこの男を知らなかった。大して彼は、ここに

来る前から私のことを知っていて、しかも懂れていたとまで言った。これほどの力を持っているやつに懂れてると言われると、まったく悪い気はしない。

「あとアイレイン、お前ショートジャンパーだろう？」

落ちていく私を抱きとめたときのあのアイレインの移動速度。ショートジャンプ以外であんな速度はありえない。

「……実はこれも言っただけですけど、僕が自分の魔力で使える魔術って、ショートジャンプと紫電一閃だけなんですよね」

それを聞いた瞬間、不覚にも少し笑ってしまった。

「不器用だな、アイレイン」

「む、笑わないでくださいよ。僕だって困ってるんですから。なんならシグナムさんが教えてくれてもいいんですよ？ほかの魔術を」

そんなことを言いながら、ふと自分に芽生えた気持ちに気づく。アイレインについて、もっと知りたい……そんな気持ちに。

「……………なあ、アイレイン」

「なんです？シグナムさん」

そして、思うが先か言っが先か……………

「お前の技術を、私に教えてくれないか？」

「え……………」

「お互い、まだまだ至らぬところが多い。なら、それを補い合うのは上策だろう？」

「…それもそうですね。お願いしますね、シグナムさん」

アイレインのことを、もっと知りたい。

こいつと同じ時間を、同じ場所ですごし、新しい何かを見つけない。そんな思いが募った結果、最後にアイレインにこんなことを言った。

「シグナム『さん』ではない。……………シグナムと呼んでくれ、ジーク」

ここにまた、気づいてはいないが彼に恋する少女が一人誕生したのである。

同刻　ベルガ自治区　聖王教会　執務室

「へえ……そんなことがあったんですか」

「まったく、シグナムもアイレインさんも加減を覚えてほしいもんですよ……」

「はやての部隊もなかなか大変そうね……あ、アイレインさんと言ええば。」

「ねえはやて、ジー……アイレインさんは元気？」

「まあシグナムとやり合うくらいには元気あるみたいや。カリムはアイレインさんと知り合いなん？」

「ま、まあね！ちょっと前に知り合ったばかりなんだけど」

「くそうやったんか」意外やなあ。あ、そろそろアイレインさんみつ

ちり絞らないといけないから通信切るで？いままでずっとシグナムの看病しとつたみたいやし>

「わかったわ。お仕事がんばってね、はやて。アイレインさんによるしく言っておいて」

そういつて通信を切つた私は、机に体を投げ出してため息をつく。

「もしかしてシグナムもジークの良さに気付いたり……そんなことはない……よねえ？」

こちらにも恋する乙女、本日も愛しの彼に思いを馳せている……………

第5話 炎剣と魔弓（後書き）

なんかぐでつてますね

あとキャラがおかしいきも……

そして姉さんにフラグを立ててみましたが、実際ヒロイン決めてないです

たぶん順当にフラグ増やしていく……かも？

また次回にご期待を！

感想待ってます！

《次回予告》

「初めての実戦、みんなしっかりいこうね！」

「大丈夫ですよキャラ。僕がエリオも君も、スバルもティアナも、みんな守ります」

「やあ、調子はどうだいジーク」

「疲れてるんで切ってもいいですか？ ジェイル」

次回に向けて、テイクオフ！

第6話 ファーストアライト……となにか（前書き）

ネタは湧くんですがそれを文章にできない……orz

今回はファーストアライトですね

実際FW勢をどう書くか決めてないのでつらいんですがね

それとなかなか感想やお気に入り登録がなくてつらいとか言ってみたり……w

まあ頑張っ書いてきますね

第6話 ファーストアラート……となにか

機動六課 アイレイン私室

「たまには砂糖を入れたコーヒーもいいですね。甘いものは頭の栄養になると聞きますが確かにすっきりします」

六課から少し離れたところにある沿岸のベンチに腰かけて、普段とは違い少し砂糖を入れたコーヒーを飲む。

オフシフトのときはやはりゆったりするのが至福の時ですね。

これで特に仕事が入らなければ何の問題もないんですが、僕がこうして暇してる時に限って緊急招集がかかるというやつでして。

<緊急連絡です！レリックと思われるロストログアの反応を感知。

場所はエイリム山岳丘陵地区、対象はリニアールで山岳地帯を高速で移動中！>

「まさか本当に出勤とは……」

実は前に陸士108の手伝いやつてた時も、僕がオフの日に限って緊急出勤で僕が駆り出されてたんですね。ほんとついてないですね……

作戦エリア空域付近 ストームレイダー内

「みんな新デバイスでいきなり初実戦になっちゃったけど、練習を思い出してやれば大丈夫だよ！」

そういえばたしか全員のデバイスが新しくなったんでしたっけ。まあ前々からティアナのアンカーガンとスバルのローラーも壊れそうでしたからね。

エリオとキャロのはたしか必要最低限の機能しか使えないようになってたってシャーリーさんが言ってたような。

しかし新デバイスでいきなり実戦とは、新人たちもあんまりついてないですね。実戦訓練と考えればいい環境ですが。

「作戦を説明するです！まずなのは隊長とフェイト隊長、ヴィータ隊長で制空権を確保、そのあとライトニング、スターズでリニアの制圧です！今回はガジェットI型が多く確認されていますが、おそらく未確認のガジェットもいると思われるので気を付けてほしいです！」

「制空権奪取後はヴィータ副隊長はライトニングの援護に、なのは隊長とフェイト隊長は増援に注意を払いながらティアナとスバルの援護をお願いします。僕はここに残ってストームレイダーの援護をしますので、こちらのことは心配は無用です」

「……はい！」「……」

リンさんと僕の作戦確認に、新人たちはしっかりと返事をする。しかしガジェットとは………ということは、僕の休暇をつぶしたのはジェイルということで間違いありませんかね？これはあとでこそしお話が必要ですね。

「……………」

「きゅくる〜?」

そんなことを考えていると、視界にふと不安そうにうつむくキャラ口と、キャラ口を心配そうに見つめるフリードの姿が映った。

「キャラ口……不安ですか?」

「は、はい……………」

キャラ口は視線を私に向けて答えるが、やはりまだ不安そうだ。キャラ口の不安は一体どこにあるのでしょうか。アルザスの真竜にフリードリヒ……二体の強力な竜を召喚し、制御する自信がないのか。はたまた初めての出勤が不安なのか。まあ、どちらにせよ不安なことには変わらないんでしょうけどね。

「……………大丈夫ですよ」

「え…………?」

「僕が守りますよ、キャラ口。スバルもエリオも、ティアナもキャラ口も、みんな僕が守ります。もし制御できなくてフリードが暴走した

って、僕が止めてあげます。だから心配せずに、普段通り頑張ってください」

そう言いながら、キャラの頭を撫でる。

初出勤は誰だつて不安だろう。敵は普段訓練で戦っているガジェットI型が基本とはいえ、未確認のタイプがいる可能性があれば余計に不安になるだろう。

だからこそ、僕が守ってあげないといけないんじゃないですかね。少なくとも、機動六課にいる間だけは。

「はっ、はい／／／」

キャラはなぜか顔を真っ赤に染めながら元気よく返事する。

さて、キャラも元気になったことですし、そろそろ作戦開始と行きますか……

30分後 戦闘空域 ストームレイダー内

「制空権は完全に掌握、またライトニングFWがレリック付近にて未確認の重装甲型ガジェットに遭遇！現在交戦中です」

ここまでは完全に八神さんの立てた作戦通りですね。八神さんの指揮官としての腕には目を見張るところがあります。

未確認型が多少気になるところではありますが、ヴィータ副隊長も向かっているから大丈夫ですかね。

<……っ！！大変です！エリオくんが未確認型の攻撃に被弾しリアから落下！キャロちゃんも一緒に飛び降りました！！>

「アルトさん、ヴィータ副隊長の援護はどうなってますか？」

<到着まであと少しかります！！………ちょっと待つてください、これは……>

「なにかあつたんですか！？」

ロングアーチの情報に何かが引っかけたようで、リインさんがアルトさんの発言に反応した。

<レリック周辺に新たに未確認ガジェットが接近中の模様！かなりの高火力型のように！>

高火力型……まさかジェイル、レリックの奪取よりも六課の戦力をそぐことが目的なのですかね？

しかしそれにしては詰めが甘い気がしますね。ですがジェイルはそこまで甘い奴でもないはず……。

「………このままだとヴィータ副隊長が危ないですかね」

「どういう意味ですかそれは！？」

細かい説明はできないですが、おそらくその未確認型は高濃度のAMFを搭載しているはず。

「………ヴァイスさん、ハッチをリニアの方向に向けることは可

能ですか？」

同刻 作戦区域 リニア付近
View Caro

（守りたい。優しい人、あたしに笑いかけてくれる人達を……）

リニアから飛び降りたため、慣性が乗り高速で落下しながらもエリオくんの手を……握る！！

（自分の力で……）

「守りたい！」

《ドライブイグニッション》

ケリユケイオンが光を放つ。

「フリード、不自由な思いさせてごめん。あたし、ちゃんと制御するから」

（もし制御できなくても、僕が止めて見せますから……）

「私も……私も、自分のやれることをやります！見ててください、

アイレインさん!!」

私は一人じゃない。

いくら自信がなくても、そんな私を支えてくれる人がいる。私を守ると言ってくれた人がいる。

「いくよ! 竜魂召喚!」

そんな期待に、私は応えたい! その思いを胸に、詠唱を始める。

「蒼穹を走る白き閃光、我が翼となり天を駆けよ」
魔法陣から翼だけが現れる

エリオは足元で起こっていることに驚き、ケリュケイオンは一層強く光輝く

「いでよ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚!」

View Vita

「エリオ！キャロ！大丈夫だったか！？」

「はい！」

「こっちは大丈夫です！！」

あいつらは無事だったか……… キャロもフリードリヒの召喚に成功したみたいだし、あとはこのガジェットを倒せば………

<ヴィータちゃん！敵の増援です！！>

「なっ！増援だあ！？」

リンからの通信にこたえていると、目の前に明らかに未確認型とは違う風貌のガジェットが現れる。

戦車を四脚にしたような風貌で、両肩に遠距離砲のようなものが搭載され、アームの部分には何やら筒状の武装がついている。

外見だけなら明らかに接近戦を想定していないフォルムのガジェットだ、これならすぐに倒せるか？

「まあなんであろうがぶっ叩くだけだけどなあ！！！」

あたしはアイゼンを振りかぶりながら一気にそのガジェットに距離をつめる。ガジェットは特に反応を見せない。

「ぶっ壊れ……………があっ！！！！？？」
「？？」

完全にガジェットの中心をぶち抜くはずだった攻撃は届かず、あた

しはまるで何かに弾かれるように吹き飛ばされてリニアールの壁に激突した。

なんだ今の……………AMFが発動したわけでもなんでもないのに、何で……………

あたしがそんなことを考えている間にも、重装のガジェットはお構いなしに攻撃してくる。

肩に装備していた遠距離砲からは高速の魔力弾が、腕の筒状の武装からはバリアに触れると爆発を巻き起こす魔力弾が容赦なくあたしに襲い掛かる。

「くそつ……………こんなんじゃないつまでプロテクションがもつかわかんねえな……………」

「ヴィータさん!!」

視界の端に、エリオとキャロが入る。さっきあいつらを狙っていた球体のガジェットを撃破して戻ってきたんだろが、あいつらにこのガジェットの相手は無理だ。

「馬鹿……………野郎……………ここはあたしが抑えるから早く戻れ……………」

「でつ……………でもこのままじゃヴィータ副隊長が!!」

私は必死に立ち上がってプロテクションで防ぐが、攻撃してくる未確認ガジェットの周りに球体のガジェットが4体ほど集まってきた。

（ああ……………これはあたし、死んだかな……………）

なのはが謎の敵に撃墜させられたあの日……………あたしはなのはを守る

と、そのために力をつけると誓った。

実際あれから結構な時間がたつが、私は間違いなく強くなった。まだまだ足りないとは思うけど、これでなのは守れると思ってた。でも…………それは間違いだった。見たことのない能力を持った敵に遭遇しただけでこのざまだ。力なんて全然なかった。

<三人とも、死にたくなかったら絶対に動かないでくださいね>

直後、私の横を緋色の閃光が貫いた。

5分前 作戦エリア ストームレイダー内

<召喚成功！フリードの意識レベルブルー、完全に制御できています！！！>

キヤロ…………やっぱりやればできるじゃないですか。それもこれも守ってくれる騎士^{エリオ}のおかげなんですかね？

さて、これであとはヴィータ副隊長が新型を仕留めれるかどうかにかかってくるわけですが……………

<ヴィータ副隊長がアンノウンとの交戦で負傷！生命レベルイエロ
ー、このままではっ！！！>

ルキノさんの通信とともに、ヴィータ副隊長が新型に殴りかかったとたんに何かに弾き飛ばされた映像が送られてきた。

リアクティブマギングフィールド
「RMFですか……………これは約束を破ったんですかね、ジェイル」

RMFの技術をジェイルに教えたのは僕だ。だが条件として、管理局相手には使わないように、と言っておいたはずだ。
後始末は……………僕がしなくてはいけませんね。

僕はハッチに立つと、フェンリスを起動してハッチの端に立つ。

「フェンリス、000機関に接続。ペネトレイトで殲滅します」
【接続完了……………ペネトレイト、リリース準備完了】

ペネトレイト……………六本の矢を超高速で打ち出すだけだが、今回は特別に接続の一撃をお見舞いしてあげましょう。
準備が完了したことを確認して、僕は携帯型の通信機を手にする。

「三人とも、死になくなったら絶対に動かないでくださいね」

そして宣言した瞬間に、ペネトレイトを放つ。
瞬間、リニアレールに向けて閃光が放たれた……………

2時間後 機動六課 屋上広場

<やあ、ご機嫌いかがかなジーク>

「今疲れてるんで切ってもいいですか、ジェイル。どこかのバカが約束を破ったから面倒だったんですよ」

私はさっきまで手にしていたコーヒー（ブラック）をベンチにおいて通信をとる。周囲に誰もいないのは確認しているので問題はないでしょう。

<約束破りというのは……その……RMFのことかな？>

「それ以外何があるっていうんです？」

極上の笑顔で答える。モニターの向こう側でジェイルの表情がみるみる青くなっていきます。見てて面白いですね。

<あ、あれには山よりも高く海より深い話があつてね………>

「それはぜひ聞いてみたいですね」

さらに笑みを深める。少しずつ口角が上がっているのはわかるが、それでも笑みを浮かべるのをやめない。

<じ、実は実験中にミスをしてしまったね………新型のV型（仮）が暴走して転送ポートに入ってしまったって、私がその話を聞いた時にはもうそっちに向かっていたんだよ………>

「ああ………たしかにI型じゃどうしようもないですね」

ジェイルのところのガジェット生産・実験ラインはI型（生産・実験特化タイプ）が受け持っているんですが、RMFを持っている新

型を戦闘装備も積んでいないI型で止めるというのはさすがに無理ですか。

「それならしかたないですね。一応僕がいたので対処できましたし。まあおかげでこっち一人怪我しちゃったんですがね」

<こちらの手違いとはいえすまないね……今度の依頼料は弾んでおくよ。機会があればその人にも直接謝りたいんだがね>

さすがに直接謝るのは無理な気がしますね。ヴィータ副隊長は目の前でなのは隊長がIV型におとされてるからジェイルを見ると最悪殺してしまうんじゃないですかね。

……と、通路から足音が聞こえますね。誰がわざわざこんな辺鄙なところに来るんですかね。

「人が来たので切りますよジェイル。さすがにあなたと内通してると思われるのはまずいので」

そういうと僕は通信を切り、通信機を上着の中にしまう。

僕の通信機は特製で、管理局の通信網に触れないように通信をとれるという優れものなんですよね。

おかげで通信してる姿さえ見られなければ敵と通信していても問題ないという素晴らしいアイテムです。

「……………よお、アイレイン」

どうやら通路を通ってこんなところに来たのはヴィータ副隊長のようです。

たしか怪我したから今日は仕事しなくてもいいって言われてたみた

いですし、息抜きですかね。

僕は通信機をしまつてから飲んでいたコーヒを再びベンチに置き、ヴィータ副隊長に向き直る。

「これはヴィータ副隊長、お怪我のほうはもう大丈夫ですか？」

「お、おお……………お前の援護と治癒魔法のおかげでほとんど大したことねえよ。それなのになのは達大げさに休めなんていうからよ……………」

「なるほど、なのはさんたちらしいですね。まあ僕の治癒魔法とかあんまり効果ないんでおとなしくしてもらえると嬉しいですね」

そう言いながらも僕はやはり空を見る。そこに僕の居場所がないと知っていても、そこに想いを馳せてしまう……………どこまで弱いんですかね、僕は。

「……………あたしはさ、なのはが目の前で墜ちてから、あいつの背中を守るために必死にやってきたつもりだった」

「……………」

語る彼女の眼には、何か悲痛に満ちたものがあつた。だから僕は、何も言えなかった。

「ずっとずっと訓練してきて、少しずつ強くなった実感はあつた。何度も任務に出て、あいつらと一緒に戦って、これなら守れるんじゃないかって思ってた」

「たしかに、ヴィータ副隊長は強いと思います。それこそ、他人を

守るほどの力があると」

「でも、あたしは今日誰も守れなかった！！私の力は、全然足りてなかったんだッ！！！」

最初は悲痛な色を浮かべながらもはつきりとしていたその眼が、少しずつ揺らいでいるのが見ていてわかる。あれは彼女の力不足が原因ではなく、普通の魔導師では対抗できないRMFが原因なんですよ。

「あたしはっ……あたしはっ「そんな無理しなくてもいいんじゃないですか？」え……………」

彼女が折れてしまうんじゃないかと、そんなふうに感じた僕は、ついつい目の前にいる彼女の頭に手をのせ、撫でていた。

「おっ…おい！なんで撫でてるんだよ！！」

顔を真っ赤に染めながらも文句を言い、それでいて手を振り払おうとしないヴィータ副隊長が目の前にいる。

……………これは小動物みたいで可愛いですね。ぜひともペットにいたきたいですね。

「無理はいけませんよ無理は。貴女はなのはさんを守ろうとして無意識に無理をしてるんですよ」

ヴィータ副隊長は自分を追い込みすぎるところがあると、前々から思っていましたけど。

「それじゃあ一つ、約束をしましょう」

そう言った後、僕はヴィータの視線の高さに合わせて正面から彼女を見る。

「……………約束？」

「はい……………ヴィータ副隊長」

「お、おう……………」

「……………貴女の背中へは、ここに僕がいる限りずっと僕が守りますから。だから無理はしないでください」

「えっ……………」

「代わりに、ヴィータ副隊長が僕の背中を守ってくださいね。実は僕全然防御魔法つかえないんで」

そう言いながらにこつと笑うと、一瞬副隊長が驚いたようにこちらを見る。その顔は真っ赤に染まっているが、瞳は揺れ動いている。

「あとですね、泣きたいときは僕の胸を使ってくれてもいいんですよ？」

「こんの……………馬鹿野郎がつ……………」

冗談めかしてヴィータ副隊長……………いや、ヴィータに言うと、ヴィータは僕に抱きついて大声で泣き始めた。それこそ僕が結界を張らなかつたらほかの人に聞かれるんじゃないかと思うほどの声でしたけどね。

でも、これで僕がヴィータの支えになれるなら、それはそれでいいのかもしれないね。

いつまで支えてられるかは、まだわからないですけどね……………

第6話 ファーストアラート……となにか（後書き）

ヴィータフラグっぽい感じの回ですね

一応なのは、フェイトの2人は攻略対象にしない予定ではあるんですがどうなるかはわかりませんね

あとやはり後半になればなるほどよりぐだぐだになっていきますね

スタミナが……………ww

《次回予告》

「お前……………何者だ？」

「危うく依頼主の仲間を殺してしまうところでしたよ。危ない危ない」

「証明するんだ！…ランスターの弾丸は、しっかりと敵を貫けるんだって！」

ホテルアグスタでいったい何が起るのか

次回に向けて、テイクオフ！！

感想、誤字脱字報告等待ってます！

第7話 地球出張！（前半）（前書き）

ついに初お氣に入りが来て舞い上がっている作者です。

そういえばサウンドステージの地球出張はこのあたりだったかな、
ということ思い出したので次回予告はアグスタになってますがこ
こに地球出張を入れようかと思えます

テストが近いので更新頻度は落ちますがよろしく願います

第7話 地球出張！（前半）

View Hayate

「う……ん……」

八神はやては眠たそうに眼をさすりながら、彼女のデスクに設置されている端末で連絡がないかを確認する。

八神はやては二佐という高階級にあり、門外不出のデータや機密の連絡が送られてくる可能性もあるため、端末のチェックは毎朝の日課となっている。

「重要な連絡はなし……と。なら今日もいつも通りやな」

そう言いながらデスクの椅子に腰かけると、ちょうどそのタイミングで端末の着信音が鳴り響いた。

「なんやなんや……？メール……カリムからか。こんな時間に連絡が来るとは珍しいなあ」

こんな時間に連絡が入るってことは緊急なんかな？と思いながらもそのメールを読み進めていくうちに、彼女の顔には少しずつ喜びの色が浮かび始めた……………

「出張任務……ですか？」

「せや！もうフォワード陣や隊長陣には連絡してあつたんやけど、アイレインさんも行くからな！1時間後に出発やから、準備してヘリポート集合やで！」

「はあ……突然ですね。まあわかりました」

そうはやてさんに返事をして、僕は準備のために一度自分の部屋に戻ることにした。

とはいっても僕の場合は身一つで大概のことは片付くので、あくまでフェンリスとちよつとしたものを持ち出すだけなのですが。

「しかし、隊長陣やフォワードたちのデバイスを見ていてもフェンリスの特異さがわかりますねえ」

ここ、機動六課の隊長陣やフォワード陣のほとんどはインテリジェントデバイスかアームドデバイスであるが、僕の持っているフェンリスはちよつと特殊である。

僕が基礎理論を練り上げ、無限の欲望とも呼ばれるジェイルが長い期間をかけて生み出したデバイスで、僕とジェイルは『ファントムデバイス』と呼んでいます。アンリミテッド・デザイン

幻影って名を冠しているのは、まあさまざまな形態をとるからってことでジェイルが名づけたんですね。僕は名前にこだわりはないので普通にOKしましたし。

AIも積んでいないわけではないんですが、基本的には魔法の発動時以外は喋れないようになってるんですね。機密保持のためって

名目でジェイルがそうしているわけですよ。

ということでは今は首飾り状になっているフェンリスを首からかけ、部屋に置いてある本棚から一冊の本を取り出す。
本の表紙には黒い宝石によってつくられた十字が装飾されているが、そのことが物語に絡むのはもっと後の話である……

1時間10分後 移動へリ機内

「はい、これリインちゃんのお洋服ね」

「あーシャルマルありがとうございますー!!」

現在移動中の機内なのですが、なぜかシャルマルさんがリインさんにちょっと小さい子供くらいのサイズ音服を手渡しております。
リインさんのサイズだとぶかぶかどころかずり落ちて大変なことになるんじゃないか……。

「えっと……その服は……」

どうやらティアナも同じことを思ったらしく、リインさんに質問している。

「はやてちゃんのちっちゃいころのおさがりの服ですよ!」

うん。リインさん、聞きたいことはそれじゃないんですよ。

「なんか普通のサイズというか、リイン曹長にはでかすぎるというか……」

うんキャラ、その反応が正しいですね。別にはやてさんのおさがりとかそういうこと聞きたいんじゃないんですよ僕たちは。

「あ、そういえばフォワードメンバーとアイレインさんは見たことないんですね！……システムスイッチ！アウトフレーム・フルサイズ！」

リインさんがそう言った途端、リインさんのサイズが小さな妖精サイズから普通の小学生くらいのサイズ……キャラやエリオより少し小さいくらいのサイズになりましたね。

「よつと。一応このくらいのサイズにもなれるんですよ？」

そう言いながらスカートの端を持ちながらくると回って見せるリインさん。その仕草がかわいらしかったというのもありますが、ついついリインさんの頭を撫でてしまいました。

「にゃあ！？／／／」

にゃあって、リインさん猫みたいですな。それに顔真っ赤にしてみすし……反応が面白いので、もう一回撫でてみましょうか。

「むっ……」「っ……」

「痛っ！？」

もう一回撫でようかと手を伸ばそうとしたら、なぜかヴィータとシグナムに足を踏まれました。
しかもなにか不機嫌そうですね……僕がなにかデリカシーのないことをしてしまったのでしょうか？
そんなことをしている間に、目的地は近づいていく……

20分後 第97管理外世界『地球』

湖畔コテージ付近

「ここが地球……ですか」

転送ポートにのって転送されてきた先は、湖畔にあると思われるコテージでした。

周囲は森か林かはわかりませんが木が生い茂っていますし、自然を感じられますね。

またコテージもなかなかでかい……このコテージの持ち主はかなりのお金持ちなんですかね。

「なのはっ！！フェイトっ！！」

「アリサっ！！」

「アリサちゃん！久しぶりだね！」

僕が地球と自然を堪能していると、コテージのほうから金髪の女性がこちらに走ってこられました。

あの女性がコテージの持ち主なんですかね？偉く若い方に見えますが……

「久しぶりね。ご無沙汰だったじゃない？」

「にやはは。ごめんごめん」

「いろいろ忙しくってさ」

「私だって忙しいわよ？大学生なんだし」

「アリサさーん！久しぶりですっ！」

「リン！ー！久しぶりっ！！」

どうやら今回の現地の協力者というのはさんやフェイトさん、リンさんも知り合いみたいですからたぶんはやてさんとも友達か何かなのでしょうかね。

「紹介するよ。私となのは、はやての友達で……」

「アリサ・バニングスです。なのはたちとは小、中学校の同級生よ。みんなよろしくね」

アリサさんですか……しかし、なのはさんフェイトさんはやてさんときて、アリサまで美人とは。なのはさんたちの友人は皆外見いいんでしょうかね。普通に引く手数多でしょうに、なのはさんたちは

浮いた話一つ聞きませんか。

「……よろしくおねがいします！」「……」

フォワード4人も元気に挨拶する。うん、良い挨拶ですね。

「それじゃあ、仕事内容を説明するからね」

さて、お仕事をちゃちゃっと済ませてしまいたいようなか。

10分後 地球 海鳴町 市街地

「車の運転なんて久しぶりなんですけどねえ……リンさんは車酔いとか大丈夫ですか？」

「私は全然平気ですよ！」

僕が運転する車の助手席で、リンさんは元気に答える。

ミッドではそこそこ乗ってはいましたけど、こっちで乗った経験はないですからね。なかなか緊張しますよ。

今はロストログアを探すためのサーチャーを設置しています。

結局レリックではなかったようですがね。

スターズ、ライトニングと固まってしまい僕が一人余ったので、急遽リンさんに一緒に来てもらうことにしました。

「そういえばアイレインさん、ヴィータちゃんやシグナムと何かあったんですか？」

「ヴィータとシグナムと……ですか？特には……」

僕がそういうと、リインさんはむむむ……と唸るような表情になった。

「リインさん？どうしたんです？」

「……なんでシグナムとヴィータちゃんは呼び捨てなんですか？」

ああ、そのことですか。

「いえね？ヴィータとシグナムが呼び捨てにしてくれて言ったので、呼び捨てにさせてもらってるんですよ。未だに敬語は抜けませんけどね」

敬語に関してはいまさら敬語なしと言われても難しいレベルに定着してしまっていて、前にヴィータに敬語やめろって言われた時もどうにも敬語が出てしまったんですよ。

「……………不公平です」

「え？」

「不公平だって言っただですよっ！ヴィータちゃんやシグナムも呼び捨てなら私も呼び捨てにしてくださいっ……！」

少し顔を赤くしながらリインさんが言う。……まあ呼び捨てにしろって言われれば普通にそうしますけどね？

「わかりましたよ、……リイン。これでいいですか？」

「そ、それでいいんです！／＼／」

「……顔赤いですけど、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫ですよっ！！」

そんなこんなで、リインと一緒にサーチャーを設置し終わり、コテージに向けて帰ることになりました……

第7話 地球出張！（前半）（後書き）

なんか雑な感じが……一応しっかり書いてるつもりではあるんですけどねえ。

前後半で終わる予定ですが、次回は奇想天外なことが起きるかもです！

では、後半に向けてテイクオフ！

第8話 地球出張！（後半）

「そうですそうです。シャルさんやっぱ筋はいいじゃないですか」

「そ、そう？そういつてもらえると嬉しいわ！」

僕は今シャルさんに料理を教えています。

え、なぜそうなったか？それについてはこれから。

サーチャー設置20分後 湖畔コテージ

コテージ内

View Eyera in

「わざわざ案内していただいてありがとうございます。アリサさんも暇ではないでしょうに」

「気にしないでいいわ。それより貴方、昔ははやと同じ部隊だったんだって？」

リンとサーチャーを設置し終わったあと、僕は荷物をコテージ内に置くためにアリサさんにコテージを案内してもらっていました。それで、今は荷物を置き終わってアリサさんが昔の部隊の話をしてきたので、雑談をしているわけです。

「はやてさんは指揮官としての経験を積むのも兼ねて、僕はいろいろあつてスバルの親のゲンヤさんの部隊にいたんですよ」

当時はまだまだ新人に近かったはやてさんが、指揮官講習も兼ねて陸士108隊に来たときに知り合ったのが最初だった。

あのことはただ単に若いのに魔導師ランクも高いエリート程度の感じかもしれませんが。

「そのいろいろっていうのは話にくい内容なの？」

「大した事情はないんですがね。実家が魔道具商で、陸士108隊と親密な関係にあつたんですよ」

「魔道具商？魔道具ってデバイスとかのこと？」

アリサさんが魔道具と聞いて首をかしげる。まあ詳しくもない人にはわからないとは思いますよ。

「魔道具っていうのは、魔導師が使うカードリッジのようなものを活用して動く簡単な小道具ですよ」

そういつて僕はカバンの中から一つの魔道具と魔道具用のカードリッジを取り出す。

姿かたちは双眼鏡そのものだ。

「それは？」

「これは魔道具の一つですよ。外見は通常の双眼鏡ですが、このカードリッジをさすと倍率を15000%まで、さらにサーモグラフィ効果と暗視、赤外線探知にも使える優れものですよ」

「なんというか犯罪者御用達のアイテムね」

「まあそんなこと言わないでくださいよ。両親が無駄に高機能を追いつけた結果なんですよ、これ」

たしかに高機能ではあるとは思いますが僕も。でも赤外線はいらないでしょうさすがに。

そんなことを思いながら、窓から外をのぞいてみる。

「……………」

……………しかし無駄に倍率が高い。湖を見ようとしてもただの水にしか見えないくらいの倍率ってなんなんですかそれは。

「あつれ？なにが違うのかしら……………」

「今の声…………シャルさんですかね？何かされてるんですか？」

魔道具の双眼鏡もどきを使って遠くを見てみると、すぐその部屋からシャルさんの声が聞こえてきた。

アリサさんはなんというか、またやってるのねって感じの視線を部屋に向ける。

「シャルさんがキッチン使って料理してるのよ……………」

シャルさんの料理ですか……………見てみたいです。ね。ちよっと見に行ってみましょうか……………」

——そして現在

「それにしても最初はひどかった……魔道具に食べ物に入ってる原材料を調べる便利アイテムがなかったら即死でしたね」

「さ、最初のことは忘れてくださいよ！」

忘れようにも忘れられませんよ。

どうして食べれるものを混ぜ合わせていったはずなのに口にしていけないものが生成されてるんですかね。

「しかしまあ、これなら店に出しても恥ずかしくない出来のはずですよ！僕が保証します！」

「アイレイン君の教え方はわかりやすくていいわよ。ほかの料理にも応用効きそうだし」

「ああ、ジークって呼んでもらって構いませんよ。親しい人は割とジークっていうので」

「ジーク？ふつうジークならSかZじゃないの？アイレイン君って」
「じゃなかった？」

おお、ほかの人はあんまり気にしないのになかなか細かいところついてきますね。

「」っていうのはまた別なんですよ。ジークっていうのは昔からの

僕の愛称なんですよ」

「そう？そう呼んでもいいならそのほうが気楽でいいわね」

正直、今回のこのお料理教室（仮）は信じられない労力をつぎ込みましたとも。

まず食材以外のものを使おうとするのをいさめるところから始まり、慣れないうちは隠し味とかは気にせず、全部マニュアルどおりでいいからっていうのを教えるために具体例をあげたりなどなど。でもですね、たしかに疲れこそしましたけど……

「ありがとね、ジークくん！」

こんなに気持ちのいい笑顔が見れるんですから、悪くもないと思いませんか？

10分後 湖畔コテージ前 バーベキュー会場

バーベキューとは、燃え上がる炎の上に置かれた網を舞台に繰り広げられる戦争である。

そう感じずにはいられない光景を見ながら、僕は苦笑いを浮かべていた。

「おいこらスバル！人の肉とるんじゃないやねえ……！」

「今日……いえ、この時だけは無礼講ですよヴィータ副隊長!!」

「おもしれえ……この私に勝負を挑むとはいいい度胸だな!!」

「まったく……たかが肉の一枚や二枚で騒ぐとは「シグナムの肉もくらい!」ヴィータ貴様皿の上からとるのは卑怯だぞ!」

「卑怯も何もねえだろ!!ここは戦場だぜ!」

主戦場で繰り広げられている死闘……スバル、シグナム、ヴィータ、あとは黙々と奪い合いを繰り広げているエリオの4人は元気だな、相変わらず。

「あ、なのはそのお肉もう食べれそうだよ?」

「このお肉おいしいね。さすがすずかちゃんが用意したお肉だね!」

「すずかちゃんこのお肉高いお肉ちゃうんか?」

「それほどでもないよ」

こちらはまったく幼馴染組ですね。

主戦場とは違いお互いが譲り合うという微笑ましい景色であります。

そして……

「ほら、せっかく作ったのに持っていかなかったら意味ないですよシャルさん」

「で、でもいままでは生物兵器って言われてたし……………」

ま、まあ最初の段階は生物兵器ともいえましたね。普通に実用性あるレベルでしたし。

だが今のシャルさんは違いますよ！それを見せつけて見せましよう。

ということで料理がうまいはやてさんを手招きで招集する。

「アイレインさんどうしたん？」

「いやね、これを食べてみてほしいんだけど」

僕が指をさした机の上には、ごく一般的な焼きそばが置かれている。

「この焼きそばを食べればいいんか？なんか裏でもあるんじゃないやろな？」

「ちょっと新しいレシピを試してみたかったですよ。せつかくだから料理がうまいはやてさんに食べてもらおうかと思ひまして」

なら…………、と言つてはやてさんは焼きそばに箸をのぼす。そして遠目からシャルさんがこちらの様子をつかっている。

「こ、これは……………！？」

「どうです？」

「……………普通の焼きそばやな。特に何か入れた感じもせえへんけど、普通においしいで？」

おいしい。

「やつ……………」

本人も料理が得意なためなかなか舌の肥えているあのはやてさんがおいしいと言った。
つまりそれは、シャルさんの料理が大成だったってことを示している。

「やったよ……私頑張ったよジーク君……」

僕の正面からシャルさんがまるで飛び込むかのように抱き着いてきた。

「ちよっ！？シャルさん胸が当たってますよ胸が……喜んでるのはわかるんですけど少し抑えて！」

「抑えるなんてできるわけじゃない……だってはやてちゃんがおいしいって言ったんだもの……」

「……いったい何がどうなつとるん？」

シャルさんが大歓喜している中、まったく話についていけないという表情のはやてさん。

主戦場にいるメンバー以外は何があつたのかとこちらを覗き込んでくる。

さて、そろそろ言えはいいですかね。

「実はですね、今ははやてさんが食べた焼きそばはシャルさんが作つたんですよ」

「シャルさんが作つたんか」

「へえ、シャルさんの作つた焼きそばか……」

「すごいいいにおいもするし……」

……

「「つて！え〜〜〜〜つ！！！！？？？」」（六課全員の声）

「そこまで驚かなくなつていいのに……………」

「シャルさん、これはさすがに同情します……………」

——シャル焼きそば騒動から1時間後 海
鳴市内 スーパー銭湯

ということ、今は海鳴市内のスーパー銭湯に来てますねはい。
銭湯というのはミッドでも何度か行ったことがありますね。FWたちはさすがに行ったことはないかもしれませんが。

先ほど入り口でヴィータを子供つて言ったスバルがヴィータに拳骨食らってたんですが……

「あ…よかった。ちゃんと男女別だ…」

「広いお風呂だって、楽しみだね、エリオ君！」

「あつ、うん、そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

「えっ？エリオ君は？」

……………今はこんなことになってます。

しかしさすがにエリオが女湯に行くのはどうかと思うんですが。

「えっ？ぼ、僕は男の子だし…」

「うん、でも…ほらあれ！」

キヤロが何かを目ざとく見つけて、明るい声を出す。

「注意書き…えっと“女湯への男児入浴は11歳以下のお子様でお願いします”…」

「エリオ君10歳だから大丈夫だよ！」

その注意書きを見つけたエリオは絶望の色を顔に浮かべている。
まさか規則に嫌われるとは……エリオもついてないですね。

「折角だし、一緒に入ろうよ」

「フェイトさん！？」

フェイトさんがエリオに追撃を繰り出しましたね。

エリオは真剣に何かを考えるような表情をしている。

「えっ…あ、い、いや、あ、ああですね、それはやっぱり、スバルさんとか隊長達とか…アリサさん達もいますし…」

「私は別に構わないわよ」

「って言うか、前から“頭洗ってあげようか”とか言ってたじゃない」

「うっ…」

エリオはティアナとスバルのまさかの問題無い宣言に狼狽える。
しかしティアナ、スバル。いくらエリオがまだ10歳だからってもう少し恥じらいというものをですね……まあいいですが。

「あたし等もいいわよ。ねっ」

「うん！」

「いいんじゃない。仲良く入れば」

「そうだよ、エリオと一緒に風呂は久しぶりだし…入りたいなあ…」

アリスさんやさっきのバーベキューで合流していたのはさんたちの幼馴染の月村さんまでもがいいといいだし、エリオは明らかに不利になっていた。

仕方ないですし、助け船を出してあげましょう。

「ほらエリオ、早くいきますよ。どうせ反論したって勝てないんですから」

「あ、アイレインさん……」

ものすごいキラキラした目線でこちらを見るエリオ。
あの状態から助けてもらえたのがそんなにつれしいんですかねえ。

女湯なんて子供のうちしか体験できないんですし、嫌がる必要もないと思いますけどね。

「そっか……」

ものすごく残念そうな顔をするキャロ。

そんなに残念ならこっちに助け船を出しておきましょう。

「キャロ、あのですね……………」

「……………あつ！じゃあ受付の人に聞いてみます！」

とりあえずキャロに言ってだけはおきました。後どうするかはキャロ次第ですね。

ということで、僕とエリオはせつせと男湯に歩いて行った。

「アイレインさんって、なんかお兄さんって感じですよね」

男湯に入ってゆったりとお風呂を満喫していると、エリオが唐突にそんなことを言ってきた。

「兄のよう……ですか？あんまり実感はないんですが」

「なんていうか……面倒見もいいし、やさしいし、しっかり者って

感じじゃないですか」

うゝむ、美化されてる気がしなくもないですよ。
僕なんて自分がやりたいことをやってるだけなんですけどね。

「そう思つたら、僕のことをお兄さんって呼んでもいいんですよ？」
とか冗談で言ってみたりしたんですが、

「じゃあお兄さんって呼ばせてもらいます！」

……冗談ではすみませんでしたね。
まあお兄さんと呼ばれて悪い気がしないのも事実ですし、これでいろいろ相談とかしてくれるようになると嬉しいですが。

「エリオくゝん！」

「キ、キャロ！？なんで男湯に！？」

「11歳以下なら女の子が男湯に入ってもいいってアイレインさんが言ってたから……」

「お兄さん！？」

そう、男湯に移動する前にキャロに言っておいたのはこういうことですな。

11歳以上の男の子が女湯に入れて、逆がだめなんてそういう場合はほとんどないですから。

「さて、僕は露天風呂にいくので二人は楽しんでいてくださいな」

これ以上いるとエリオに何か言われてしまいそうなので、そそくさと退散することにします。

それに露天風呂というのにも入ってみたいと思っていましたし。

ということで露天風呂についたので、とりあえず湯船につかって息を吐き出す。

「ふむ、この露天風呂というのは同じ湯船につかっているのにまた違った感じがしますね」

「あれ？誰かいるの？」

……………え？

今この露天風呂の奥の方から女の人の声聞こえたんですけど気のせいですよ？

「まさか女の人がいるわけ……………」

「いったい誰が……………って！？／＼／」

「あつ、アリサさん！！！？？」

煙の向こうにいたのはアリサさんでした。

幸いにもタオルを巻いておられたのでアリサさんの姿を目視した瞬間に一瞬で目をそらしたから特に見てないはずですが……………

「いったい誰が……………って!?!?!」

「あつ、アリサさん!!??」

混浴とは書いてあったが、まさかジークが入っているとは思わなかったわ……………。

でもジークは漫画とかでよくある、あまりの衝撃に固まっちゃってこつちを凝視することもなくすぐさま私のいないほうに向きなあった。

「ふ、普通なら大声で叫び声をあげるところね……………」

「も、申し訳ないです……………い、今すぐ出るんで……………」

「べ、別にでなくてもいいわよ!混浴になってるみたいだからそのくらい気にしないわよ……………」

ジークのほうを見ているのも気まずいのでぱっと視線を女湯側の入り口に戻すと、そこには混浴を示す注意書きがあった。

「いや、でもアリサさんも僕みたいな初対面と一緒に風呂は気まずいでしょうし……………」

今日初めて会った時からなんとなく思ってたけど、ジークってすごい周りに気を使ってるわよね。

ちなみにジークって呼んでるのは向こうがバニングスって呼ぶのがまどろっこしかったからアリサって呼びなさいって言ったらしいのよね。

「私がいいって言うてるんだからいいでしょ。せつかくの本場の露

天風呂なんだから」

「わ、わかりました……」

いいと言ってるのにまだ気を使うので、ちょっと強めに言ったらおとなしくなった。

（でも、改めて見るとジークって結構かっこいいわよね……）
ジークは間違いなくかっこいい部類に入る。私が今まで見てきた中では間違いなく最高クラスだ。
なぜか左眼に眼帯を付けているけど、それについては触れないほうがいいのかしら？

「そういえばジーク。機動六課ってなかなかすごいメンバーがそろってるのよね？」

「そうですね。若くして管理局最強とも謳われるのはさんや異例の若さで執務官になったフェイトさん、それにはやてさんはあの年で二等陸佐ですし、噂の夜天の書の守護騎士の4人までいますからね。新人たちもそれぞれ光るところがありますし、今の管理局の部隊単位で見れば間違いなく最強の部隊なんじゃないですかねえ」

何気なく機動六課の話をふってみると、ごく丁寧に細かい解説までついて話を返してくる。

それにしても、『最強の部隊』ねえ……

「じゃあ、その最強の部隊にいるジークも、やっぱり何か隠し玉でも持ってるの？」

さっきのジークの話を聞いていて、一番気になったのはこれね。

だって、管理局最強の部隊で、構成メンバーの大半は身内に近い関係の人間の部隊に何の特徴もない局員が入るってのもまた変な話だし。

それ相応の何かを持ってるんでしょうけど。

「いえ、僕はただ単に六課の人員不足を補うためにスバルの親が六課に送ったしがない魔導師ですよ」

そんなことをジークは言う。まあ私はジークがどれほど強いのかも知らないからこれ以上は聞いても何もわからないだろうから、この話はここまででいいかしら。

「……こんなこと聞くのもなんなんですけど」

「何？答えられることなら答えてあげるわよ？」

「アリサさんっていいとこの御令嬢ですから、やっぱり誘拐とかされたことあるんですか？」

……これまた突然な話題ね。まあ、誘拐なんて身近にあるものじゃないし気になるのかもしれないけどね。

「まああるわよ。変な武装組織やらお金ほしさの無謀な奴から結構な数、ね」

「その中に、魔法関連の人間はいたりしましたか？」

……？妙にこの話について聞いてくるわね。お互い背を向けてるから表情はわからないけど、声音からは興味本位という感じはしない。

「いないけど……それがどうかしたの？」

「いえ、特に意味はないんですよ。ただ、魔法関連の人間に誘拐されそうになったらおとなしく従ったほうがいいですよ」

ジークから出てきた結論は、まるでさっきまでの会話の内容とは関係のないものだ。

でも、ジークが言うつてことはそれなりの意味を持っているんだろうから、

「魔導師様からの忠告だし、ありがたくいただいておくわ」

「ま、軽く心に留めておいてください」

私は覚えてだけはおこうと、冗談めいた返事をした。

「結局、大した仕事してねえな」

自室に戻ってきたヴィータは、まるで達成感のかけらも感じない声で呟く。

それもそのはず、結局地球まで行って確保したロストログアは危険度が高いものでもなく、新人たちだけでも対処できるものだったのだ。

シグナムほどではないが戦闘狂の性があるヴィータからすれば、こ

れほど退屈なことはないだろう。

「それにしても、なんでジークは地球に残ったんだ……？」

そして、彼女の物足りなさをさらに加速させているのがジークの不在である。

ジークと『お互いを守り合う』という約束を交わして以来、たまに時間があるときにジークと二人でコンビネーションを重点に置いた自主トレーニングを行っていた。

個人スキルで他人を守るというのにはやはり限度がある、というジークの提案によりやり始めたトレーニングではあるが、このコンビネーションというのが意外にヴィータに不足しているということがわかり、今では暇さえあればやっているような状態だった。それができないとなるとやはり落ち着かないのだろう。

「それにあいつ、アリサと仲良さそうに話してたしよ………」

それでまた気が晴れない。

ジークと訓練するようになって、その訓練の休憩中によく話すようにもなった。

ジークはかなり戦い慣れをしているようで、本来戦闘プログラムとして作られたヴィータ達守護騎士をも驚かせるほどに戦いに精通していた。

だから休憩時間に立ち回りや相手の武器に合わせた対策などを話し合うことが多かったが、そんなことを重ねるうちにお互いのプライベートな話をするようになっていた。

とはいっても、『最近はどう』とか『今日の新人たちは』みたいなとりとめのない会話だが、それすら今は生活サイクルの一部のようになってきているのだ。

部隊のほかのメンバーよりもジークに近いということに一種の喜びを感じていたヴィータだからこそ、まるで自分の話し相手が突然奪われた、というように感じてしまったのだろう。

「はぁ……………」

《ヴィータちゃん、悪いけどまたすぐ出撃になるよ》

何とも虚しくなつてベッドに倒れこむと、実戦モードの声をしたなのはから念話が飛んできた。

《昨日地球から帰ってきて休暇かと思つたらまた出勤か。で、今回は何しなきゃいけないんだ？》

《テロリストが立てこもってる施設の鎮圧、および人質1名の救出が今回の任務だよ》

《人質はもう身元は分かつてるのか？》

《うん。鎮圧目標が立てこもってる場所はホテル・アグスタ、そして人質は……………》

なのはは少し溜めてから言う。

《……………人質は、アリサちゃんだよ》

これが、すべての崩壊の始まり

第8話 地球出張！（後半）（後書き）

いろいろと話の流れがおかしくなってきたー！

ホテルアグスタをやるとは言ったが、誰も本編に沿うとは言ってないよ（↑

とまあそういうことで、次回からはかなりオリジナル要素が増えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3113w/>

魔法少女リリカルなのはStS to Force -0から1まで-

2011年11月14日21時12分発行